

組織的な大学院教育改革推進プログラム 平成20年度採択プログラム 事業結果報告書

教育プログラムの名称	: 表現空間創出による高度人材育成と職域開発
機関名	: 女子美術大学
主たる研究科・専攻等	: 美術研究科芸術文化専攻
取組代表者名	: 杉田 敦
キーワード	: 美学、表象文化論、芸術・文化政策、教育・学校、社会問題・社会運動

I. 研究科・専攻の概要・目的

芸術文化専攻は色彩学、美術史、芸術表象の3研究領域で構成されており、17名の学生が在籍している。専任教員数10名、非常勤講師は16名。(平成23年度より美術教育領域が加わって4研究領域となった。)

美術における伝統と創造の価値を統合する理論的な枠組みを構築し、多様な今日的視点から美術についての理論的な分析による高度で多面的な研究を行うためのカリキュラムを編成している。美術における伝統と創造の価値を統合する理論的な枠組みを構築し、多様な今日的視点から美術についての理論的な分析を行い、色彩・美術史・芸術表象に関する高度で多面的な研究を行う人材の養成を目指している。

II. 教育プログラムの目的・特色

大学院教育の実質化について、芸術分野での社会ニーズに対応した表現空間創出による高度人材と職域開発を目的に、実践的プラットフォームを構築する。そして、各プログラムの帰結としてのアートセンターの独立化という将来ビジョンを掲げた実践性を重視するプログラム。実践的プラットフォームの教育プログラムには3段階あり、この実践により大学院生をエンパワメントする。

III. 教育プログラムの実施計画の概要

1. 表現空間の創出プログラム

- (1)表現空間の創出プログラム理論系研究者の実践性の開発の核として、アート&デザイン分野の表現者、研究者の社会参画フィールド(表現空間)を創出、拡大し、それに対応する実践的な高度専門性を養成する。
- (2)実践的プラットフォームの特徴アート&デザインの高度な専門家人材をつくる場として《実践的プラットフォーム》を設定する。プラットフォームは、社会参画機会を準備する〈プロジェクト型プログラム〉と、実践状況の報告、批評、高度化の手段としての〈ダイアログ型プログラム〉、また、プログラムの活動を記録し、活用可能な資料とする〈ドキュメンテーション型プログラム〉によって構成される。
- (3)実践を通じた新たな職域開発通常、大学院は理論や研究を整理し、新たな知見を付加した論文発表を求める。本プログラムは、大学院生の実践分野を創出し、それに対応する問題解決型の高度な専門性を養成することにより、大学院生の社会参画フィールドそのものを創出する。この「高度人材育成」と「実践フィールドの創出」という二本柱構造は、他分野の大学院にも適用可能なプログラムである。

2. アート&デザイン空間(現場)における高度専門職業人材育成プログラム

従来の職域(教育者、研究者、学芸員)に加え、創出可能なアート&デザイン現場(職域)と

して、エディター、アート・ライター、展示プログラム・コーディネーター、教育プログラム・ディレクター、アーカイヴ・ビルダー、ワークショップ・コーディネーター等、社会的ニーズに即した活動を調査し、それに対応する人材を育成する。

3. 実践的プラットフォーム導入による大学院の実践性の強化

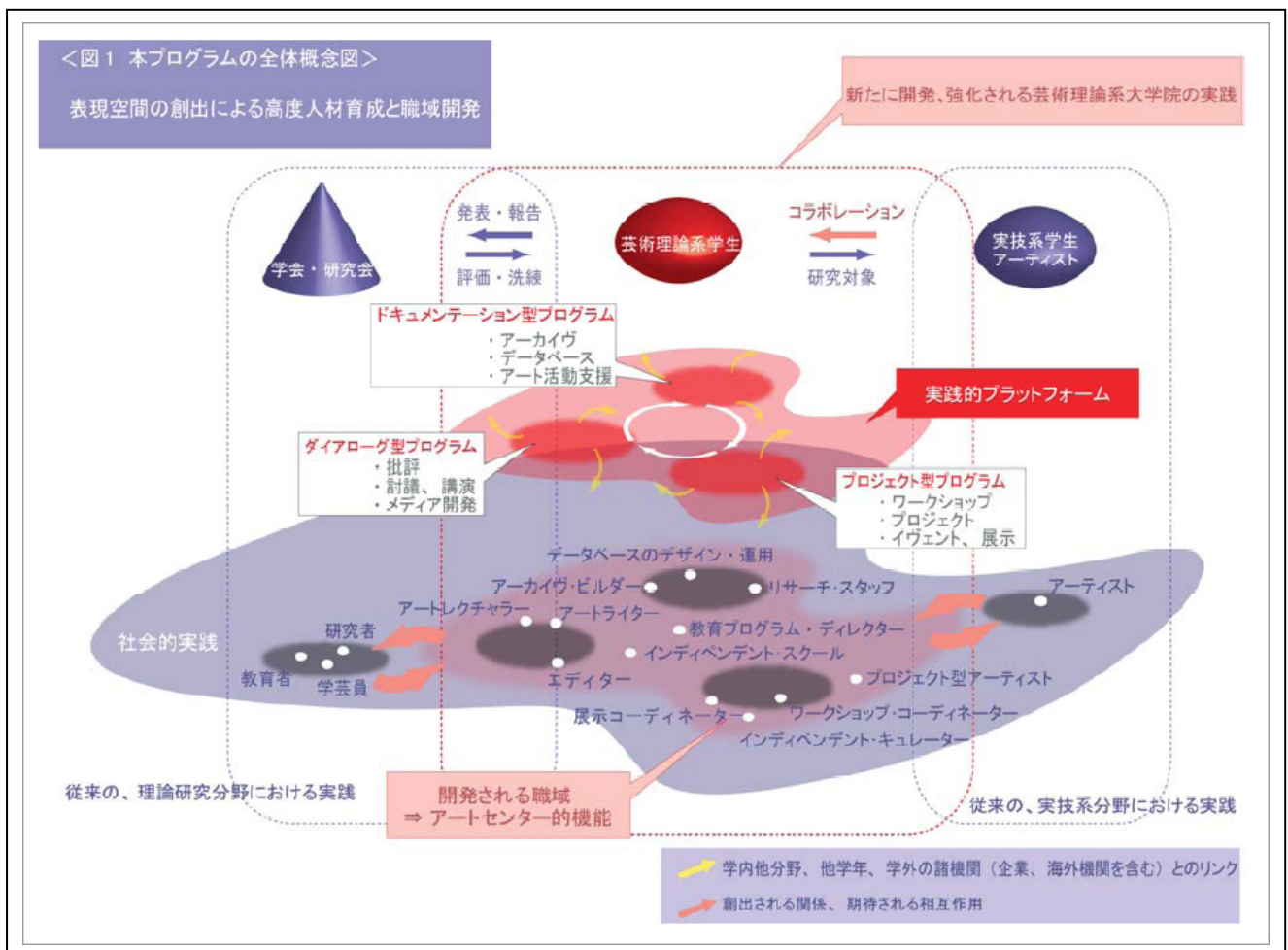
本プログラムの実践性は、個々の大学院生はもちろん、大学院それ自体を、社会の中に一つの実践主体として明確化する。とりわけ〈ドキュメンテーション型プログラム〉はアートセンター機能としての認知が進むことで、学内の実技分野はもとより、地域社会、国内外の大学、アート関連諸機関にとって有用なアート活動支援機関へと発展させる。

4. ケースメソッド

ケースメソッドをアート&デザイン分野に応用し、先駆的で多岐にわたる実践・事例を学ぶことで、多角的分析力、問題解決力、応用力を養成するマネジメント重視型のプログラムとする。

5. 学内外の資源を最大活用する新たな教育システム・方法の開発

- (1)学内外の人的・社会的資源を教育資源として取込む制度開発（実務家教員、RA制度導入等）。
- (2)アート&デザインの現場を利用した体験型授業科目（実地研究、ファシリテーション型、コラボレーション型授業等）やインターンシップ科目を導入実施する。



IV. 教育プログラムの実施結果

1. 教育プログラムの実施による大学院教育の改善・充実について

(1) 教育プログラムの実施計画が着実に実施され、大学院教育の改善・充実に貢献したか

本取組では実践的プラットフォーム上にて、①プロジェクト型プログラム、②ダイアログ型プログラム、③ドキュメンテーション型プログラム、および①～③の要素を併せ持つ④統合型プログラムで、以下のプロジェクトを実施した。

①プロジェクト型プログラム

・Artist Critic Program (ACP) / アーティスト・クリティック・プログラム

学生の批評能力、プレゼンテーション力の向上と、実践的な表現空間創出を目的として ACP の活動を展開した。9月に学内展示に向けたアーティストを募集し、10月に決定した学生アーティストによる学内展示を実施。それを受け、学生による作品のプレゼンテーションと、芸術理論系の学生らによる批評会をそれぞれ2回行った。11月にはそれらの批評に対する批評会として、第三者を交えてのオープン・ディスカッションを開催し、3年間で各年約40名の学生・教職員が参加した。作品制作と批評双方の考察が行われ、プレゼンテーションでは、アートに対する自身の理念の捉え方を実践的に学び、ディスカッションでは、批評を通じて客観的なアートの在り方を学ぶ場となった。また、学生が冊子制作の現場における役割を責任を持ち遂行し、得られる社会的経験の獲得とコミュニケーションスキルの向上を目的とし、12月より学生が主体となって刊行に向けた編集作業を行った。プログラムの活動記録だけでなく、学内外のアーティストへのインタビューや、批評家への執筆依頼することで、多様な形の研究と実践機会として機能し、3月に冊子を発行。以後毎年刊行してきた。

平成20年度は、7月に企画展覧会を本学のアートギャラリー「ガレリア・ニケ」にて開催。学生チームが主体となりアーティストの選定、展示会場、設営、運営を行った。会期中にはヴォイス・パフォーマーによるイベントや、学生による作品についての公開トークを2度実施。主体となった学生のアート分野における社会的実践活動が、協働することへの意識改善と問題解決力向上を促し、実践フィールドの充実に繋がった。

平成21年度は、アートに限らずあらゆる職域で必要不可欠な企画遂行能力向上のため、芸術理論系の学生がキュレーション（展覧会企画運営）について実施的に学ぶプログラムとして、本学杉並キャンパス「ガレリア・ニケ」にて企画展示を計画。学内からアーティストを一人選定し、平成21年7月開催に向けて、アーティストと展示概要についてのディスカッション、各地のスペースや展覧会の視察、イベントの立案、DM及びポスターの制作を行った。



<写真1: CLOSET2011>



<写真2: 平成20年度プレゼンテーション>

・video exchange program / ヴィデオ・エクスチェンジ・プログラム

平成 20 年度は、1 月に二カ国間のビデオ交換プログラムの第一回を、メルボルンのグリフィス大学で行った。本学の学生が説明を行い、同大学の学生たちが日本についてのディスカッションを実施した。また、その際のドキュメントを報告集、展示、メディア化など、多様な形態で発表するため編集作業を行った。3 月にはリスボンのオルタナティブスペース「ZDB」を訪問して提携を結び、同プログラムを行うための情報収集や意見交換を行った。

平成 21 年度は、6 月にポルトガルのオルタナティブ・スペースにて、8 月に越後妻有アートトリエンナーレ 2009 の会場にて、11 月に東京とポルトガルのオルタナティブ・スペース、およびオーストラリアの大学にて、計 5 回のラウンドテーブルを実施した。各回の討議の映像をまとめ発信した。

平成 22 年度は、11 月から 3 月にかけて、ノルウェー・メキシコ・日本間で相互に撮影を実施し、海外の芸術組織とグローバルな連携機能の拡充を継続することができた。



<写真 3 : Portugal to Australia>



<写真 4 : exhibition “who you know? who knows you?” >

・ on the earth project / オン・ジ・アース・プロジェクト

平成 21 年度は、11 月にキャンパス内で集めた落ち葉を使って、近隣の双葉小学校の児童と共に芝生に絵を描くワークショップを実施し、約 40 名が参加した。

また、社会参画におけるプログラムとして公開するため、女子美アートミュージアムにて、展覧会「On the Earth Project」を 6 月より開催。協力関係にある小学校と協働しながら準備とカタログ制作を行った。



<写真 5 : 平成 21 年ワークショップ>

・ 環境造形彫刻プロムナード (2008-2010)

平成 20 年度は溶接についての公開授業を実施し、学生・教職員計 10 名程が受講した。

平成 21 年度は、市民の日常生活にアートとの接点をつくり出すことを目的とし、キャンパス近隣の県立相模原公園に立体作品を設置した。学生は、4 月から 5 月にかけて同公園管理者と共に作品設置場所や設置作品選定の協議を行い、決定した作品に屋外設置のための補修を施した。6 月には設置基礎の工事やキャプション制作について外部業者とやりとりし、7 月の公園リニューアルオープン式典に併せ作品発表を行った。

平成 22 年度は、4 月より同公園管理者と共に作品設置場所や設置作品選定の協議を行い、決定した作品に屋外設置のための補修を施した。6 月には設置基礎の工事やキャプション制作について外部業者とやりとりし、9 月に設置工事を完了した。また、活動報告冊子を発行し、これまでの取組を捉えなおし野外における彫刻の在り方を再考察した。



<写真 6：県立相模原公園に設置された作品>

・ジョシビヤーン・コットンプロジェクト

平成 20 年 4 月に銀座での「街路ミュージアム GINZA2009」にて展覧会を実施した。キャンパス内の畑で栽培・収穫したコットンを原料に、学生や地元商店街から募集した原画を基にフラッグを作成し、街燈に設置展示した。会期中に銀座のアート・スペースで展覧会を実施し、プロジェクトの成果を公開した。延べ 120 名を越える学生が参加し、衣服制作やデザインを通しての社会貢献を実践した。

平成 21 年度は、学生が育て収穫した綿を用いて作品を制作し、3～4 月に学内で発表展示した。紡績作業は昔ながらの綿繰り機、スピンドルを用いてワークショップ形式で行い、綿の特質を体験的に学んだ。また、実社会での問題解決力を身につけるため、学外グループと協働しての銀座並木通りでの展覧会実現のための活動を行った。

平成 22 年度は、綿花栽培の経験で得た命の尊さや心の安らぎを、綿で作成したスカーフを女性疾病で悩む女性や子供へ手渡すことで共有することを目指し、北里研究所病院にて「ガン疾病者に贈るスカーフ」のワークショップや講義・制作を実施した。また、日本最南端のコットンの伝統文化を学ぶことで、繊維制作技術やデザインの視点だけではない、深い日本人の染織文化への探求と、未来に向けたデザインの在り方に繋げる「八重山ミンサー展」を実施。3 月には銀座での「街路ミュージアム GINZA2011」に参加し展覧会を実施した。14 名の学生が「生命をつなぐ」をテーマに制作したフラッグ作品約 120 点が街灯を飾った。延べ 120 名を越える学生が、衣服制作やデザインを通しての社会貢献を実践した。



<写真 8：街路ミュージアム GINZA2011>

・projective curatorial program (プロジェクトヴ・キュレトリアル・プログラム)

平成 21 年度は、11 月より、越後妻有アートトリエンナーレ 2009 で実施した全 5 回のディスカッションの様子を、展覧会形式で公開した。会期中にアーティスト 2 名、東京都アートプログラム・マネージャー、美術批評家が参加したディスカッションイベントを実施。約 60 名の学生とアート関係者らが訪れた。

平成 22 年度は、6 月に「ポルトガル現代美術展 the age of micro voyages —極小航海時代—」を女子美アートミュージアムにて開催。会期中には出展アーティストによる公開レクチャーの実施をした。大規模な展覧会の企画、展示設計の経験を積み、アートを介した国際交流の実践の機会となっただけでなく、日本とは異なる文化において国際的に成功しているアーティストの作品、考えに触れることで、これまでの大学という組織の枠組みを超えたアート活動の指針を知ることができた。



<写真 9 : the age of micro voyages —極小航海時代—>

・プロジェクト・プラクティス

本取組と外部団体のプロジェクト型の実践とが、相互に情報交換や企画や展示という社会的実践フィールドにおいて、協働参画することを目的として「プロジェクト・プラクティス」を実施した。10 月にあいちトリエンナーレの会場においてトーク・イベントの開催に協力。10 月、12 月に学内、近隣の県立公園での地域住民参加型のワークショップを実施した。本取組主体ではなく協力という形式でプロジェクトに関わることで、地域実践を別視点から捉えなおすことができる経験を得ることができた。



<写真 10 : あいちトリエンナーレでのトーク・イベント>

②ダイアログ型プログラム

・「現場」研究会

平成 20 年度は、学生が事務局スタッフとして研究会の企画や運営、編集に関わりつつ、シ

ンポジウムや勉強会に参加した。10月にゲスト交渉と、研究会開催準備を行い、11月に山野真悟氏（黄金町バザールディレクタ）を招いてシンポジウムを行った。2、3月は参加メンバーによる勉強会を行った。研究会には毎回30〜40名の参加者が訪れ、本学学生は、他大学の学生と交流しながらゲストやテーマについての文献調査や、プロフィール及び当日配布資料の作成、ウェブ・マガジン「Web Complex」リニューアルのためのディスカッションへの参加などを行った。勉強会の際にはRAサポートのもと本学学生が講読テキストについて発表した。

平成21年度は、美術という事象が成り立つ「現場」をさまざまな角度から検証する現場研究会に、事務局スタッフとして学生が参加。研究会の企画、運営、編集に関わることで、実施されたシンポジウムや勉強会に参加した。4月に美術ジャーナリスト、5月に美術批評家、6月に美術家、11月に美術ジャーナリスト、美術編集者をそれぞれ招き実施したシンポジウムの、ゲスト交渉や文献調査、プロフィール編集、配布資料作成等の研究会開催準備を行った。また、研究発表やウェブサイトのリニューアルにも参加した。



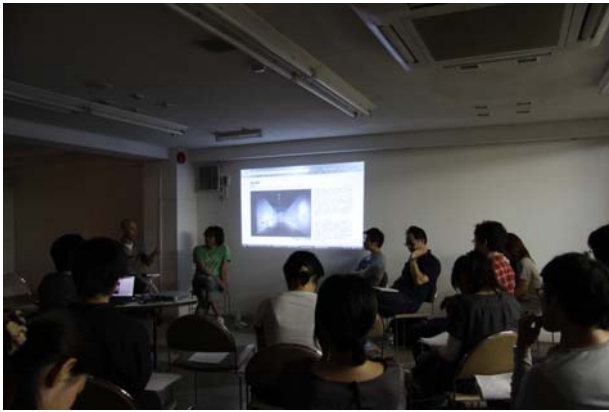
〈写真11：平成20年度シンポジウム〉

・ CCD - Community Cultural Development

平成20年度は、11月にCCD活動に関するセミナーを、学内外の人々に向け公開授業の形で行った。月には本学教員及び学生がCCDの本場オーストラリアで実情視察を行い、現地でCCD活動に取り組んでいるグリフィス大学の教授から先進事例をヒアリングした。

平成21年度は、CCDの一環として美術館の取組に着目し、12月にNPO団体代表や携帯端末機コーディネーターを招聘してセミナーを開催した。美術館をユニバーサルな視点から利用することについて、学生がより身近な問題として捉えられるよう、アートを紹介した文化政策事業の理解力と、社会ニーズへの意識啓発を促した。

平成22年度は、文化政策事業やアートと社会を繋ぐ活動をしようとする学生や若者の手助けをするために、討議する場を創出することを目的に、「CCDプラットフォーム」を全4回開催した。7月にアートNPO代表者、キュレーター、アーティスト、法律家を招き「CCD PLATFORM 001 —アートと地域、アートとコミュニティ」を女子美術大学で開催。10月にアート・スペース・ディレクター、アーティスト、社会学者を招き「CCD PLATFORM 002 —誰のためのアートなのか」を小金井アートスポット シャトー2Fで開催。1月にアーティストを招き「CCD PLATFORM 003 —art is art is art」、3月に「CCD PLATFORM 004 —artist vs artist」を学内で開催した。アート・フィールドにおいて様々な立場から実践的に活動する人々と、積極的に問題提起や意見交換を行い、アートによる環境開発・改善に対する理解力を深めた。



〈写真 12 : CCD PLATFORM 002 一誰のためのアートなのか〉

③ドキュメント型プログラム

・oral critic archive / オーラル・クリティック・アーカイヴ

平成 20 年度は、3 月にチューリヒ、ロンドン、リスボンにて批評家 3 名、アーティスト 1 名への取材を行った。これにより文章に起こすことでそぎ落とされてしまう前の、曖昧さを併せ持った批評家の生きた言説を記録することができた。これらの音声や動画を今後の国際ディスカッションや展覧会、書籍化にむけて編集、整理を行った。

平成 21 年度は、学生や研究者のアーカイヴ資料構築を目的とし、4 月に北京でアート・ディレクタ、6 月にヴェネツィアでアーティスト、7 月に東京でアート・エディター、インディペンデント・キュレーター、東京都現代美術館チーフキュレーターへの取材を行った。北京では、オルタナティブ・スペースやアートセンターの視察、ヴェネツィアでは国際展の取材・視察を併せて実施した。プログラムの活動の一部を展示・公開することを目的として、7 月より「越後妻有アートトリエンナーレ 2009」に出展。会期中には国内外のアート・ディレクタ、キュレーター、アーティストなどを招き、全 5 回のディスカッション・イベントを開催。今日のアート界における様々な事象についての討議を行い、学生、アート関係者、地元住民の実践的な交流の場として機能させると共に、その模様の映像を収録した。プログラムの協働活動の過程が、アートを介した社会貢献に対する実践的な連携活動の構築と充実につながった。

平成 22 年度は、学生や研究者のアーカイヴ資料構築を目的とし、書籍化への準備を進めながら、8 月に映画監督、12 月に美術館キュレーター、美術批評家への取材を行った。最終年度を迎え、これまで集積されたデータが展示におけるコンテンツとして、また研究における有用なアーカイヴとして活用可能な資料となった。



〈写真 13 : 平成 20 年度の取材〉



〈写真 14 : 越後妻有アートトリエンナーレ 2009〉

④統合型プログラム

・教育インターンシップ

平成 21 年度は、理論系学生へのキャリア教育手法として、文章作成・言語読解力・編集技術などの実践的な技術と教育キャリアの拾得を目的として、2 つの書籍制作の現場での教育インターンシッププログラムを実施した。学生は、美術関連書籍『アートで生きる』および『芸術表象コンセプトブック』の発行に向けた企画立案から書籍設計、取材、編集作業と、書籍制作業務全般にわたって指導を受けた。

平成 22 年度は、美術関連書籍『芸術表象コンセプトブック アート・プラットフォーム』と『oral critic archive inter-views 一語られるアート、語られる世界』の発行に向けた書籍設計、取材、編集作業と、書籍制作業務全般にわたって指導を受けた。



<写真 15 : アート・プラットフォーム>



<写真 16 : アートで生きる出版記念パーティー>

2. 教育プログラムの成果について

(1) 教育プログラムの実施により期待された成果が得られたか

① プロジェクト型プログラム

・ Artist Critic Program (ACP) / アーティスト・クリティック・プログラム

学生は、アーティストの立場で作品のプレゼンテーションをすることで、作品の在り方を客観的に捉えなおし、批評を受け止め、課題を認識・検証し、将来的な制作活動に活かされる実践的な場となった。理論系の学生は、クリティックの立場で発言することで、芸術理論を明確に構築し口述する能力を身につけ、批評的な文章展開力と理解力を高めた。理論系、制作系の学生が交流し、公平な立場でアートに取り組む姿勢を相互に検証・認識できる場を創出することで、アートの分野での問題解決力を獲得し、問題解決型人材、実践型人材としてのスキルを向上させた。また、取組の活動報告誌の制作に携わることで、芸術理論系の学生は、文章記述力、編集能力、批評能力、広報活動スキルを高める機会となった。実技系の学生は、アーティストとしての理念や作品に対する客観的な捉え方や表現力を高めることができた。学生は協働し、社会と相互に関係構築しながら、出版制作における様々なプロセスの社会的実践能力を大きく高めることができた。

・ video exchange program / ヴィデオ・エクスチェンジ・プログラム

学生は海外の外部機関や他大学と協働することで国際的な社会参画の活動機会を得るだけでなく、他言語を使用した国際コミュニケーションスキルを実践的に向上させることができた。討議手法や、ビデオ交換のプロセス等を、学生が主体となって議論することで、活動の検証と確認、問題解決力、理解力を向上させる機会となった。また、映像編集作業や翻訳作業の一部に関わることで、実践フィールドにおける技術スキルを習得することができた。

・ 環境造形彫刻プロムナード

学生たちは、神奈川県立相模原公園で相模原市役所関係者と一緒に台座や設置場所について打合せを行い、計画を具体的にしていく中で、パブリックなアート作品を計画する過程を

網羅的に体感することができた。このプログラムは彫刻を設置することで、相模原市民にアートや表現が生活のそばにあることを体感してもらうのが狙いだが、これらの取組を通して、学生はアートの意義や芸術の公共性について考え、自分たちの関わり方、立場を能動的に表明して能力を身につけることができた。また3月の公開授業では、今後のプロジェクトを遂行する上で、必要な技能をワークショップ形式の研修で経験、習得した。

- ・ジョシビヤーン・コットンプロジェクト

学生は棉を種子から育て、自らの手で収穫し、それを用いて作品を制作することで、天然の素材が生れ、加工されていく一連の過程を学ぶことができ、作品、衣服の制作にとって重要な経験をすることができた。このプログラムは最終的に、学外の銀座西並木通りでの展覧会を目指しているが、学生はその準備活動を行うなかで、社会で活動する人々との協働作業を経験し、実社会での活動力や問題解決力を培うことができた。

- ・projective curatorial program (プロジェクトヴ・キュレトリアル・プログラム)

学生は、映像編集や翻訳に関わり、制作技術を向上させた。外部団体と協議しながら企画立案を行うことで、展示設計経験を積むことができた。また、イベント参加者への出演交渉や、アテンドなどを通して、実践フィールドで求められる社会経験を獲得する機会となった。これらの活動は卒業後のキャリアで活かされる、実質を伴う実践である。また、準備段階から長期的にプログラムに携わることで、外部団体と良好な関係性を構築しながら協働しつつ、企画力、運営力、展示技術などの実践的ノウハウを学んだ。また、大規模な展覧会を企画・運営することの困難さの中で、海外アーティストとの交流を通じて、実践フィールドにおけるコミュニケーションスキル及び、他者と協働する意義を意識する力を高めることができた。

- ・プロジェクト・プラクティス

学生は、本取組と外部団体のプロジェクト型の実践と協働参画することで、地域とアート活動が最前線の場においてどのような形で実践がされているかを知見できる機会を得た。また、地域や外部団体との交流を通じて、実践フィールドにおけるコミュニケーションスキル及び、他者と協働する意義について意識する力を高めることができた。

②ダイアログ型プログラム

- ・「現場」研究会

学生は「現場」研究会の運営活動を通して、個別の作業の膨大な積み重ねにより組織が有機的に機能し始めることを体験的に学び、社会の中での研究成果発表を実現する術を学ぶことができた。研究会メンバー同士の勉強会での発表準備の際には、RAが学生のサポートを行ったことで知識の交換や共有が行われ、美術の知識や理論についての見識を深めることができた。また、学生は、現場研究会の運営活動に継続的に関わることで、充実したプロジェクト活動の展開力を身につけた。

- ・CCD - Community Cultural Development

学生は、CCDで実施した公開セミナーにより、オーストラリアでCCDがどのように認識され、取組まれているかを学び、本学でCCD活動を実践する大学院生をサポートする土壌を築くことができた。また、オーストラリアで行った実情視察で収集した情報は、本学大学院GPでのCCD活動を発展させる基盤となった。また、討議を通して積極的に問題提起や意見交換を行うことで、アートによる環境開発・改善に対する理解力を深める機会となった。アート活動の社会貢献についての認識力、分析力を高めながら、アートが持つ可能性を検証・確認することができた。また、企画の広報物デザインやイベント運営を行うことで、実践フィー

ルドにおける経験と技術を学ぶことができた

③ドキュメント型プログラム

・oral critic archive / オーラル・クリティック・アーカイブ

学生は、OCA での取材に向けて取材相手の略歴や著書などを研究・調査し、取材依頼を行ったことで、英文での文献調査能力や記述能力を養い、交渉実務を行った。英文の読解能力や記述能力、文献調査能力を培うことができた。また、OCA で集積されたデータとそのプロセスを書籍やウェブで公開するために映像の編集やテープ起こしを行う中で、学生は情報やデータの編集の仕方、アーカイヴィングの方法を学んだ。また、今回の取組に関わることで、学生は世界的規模で活躍する批評家やアーティストたちの生の言葉（＝パロール）を受け取ることができ、そこに存在する感性に訴える強さや独自の理論性から、文字に記された情報以外のアーカイブ形式の重要性を認識することができた。また、長期間の国際展に企画段階から関わることで、外部団体やアーティストと交流しながら国際的な実践経験を積んだ。地域住民やイベント参加者、来場者との交流が会場を介して活発に行われたことで、本プログラムの地域における実践的プラットフォームとしての機能を主体化させた。アートの分野における実践についての多角的な視野を獲得し、社会とのコミュニケーションの重要性を認識して、実践型人材としての自律を発展的に推し進めた。また、国内外の取材対象者の活動について調査・研究を行うことで、文献調査能力、読解能力、記述能力を向上させることができた。取材現場に立ちあい、国内外の実践的で先端的な活動や理論に触れることで、実践の在り方や姿勢を学び、自身の活動を検証・確認、意識改革に繋げることができた。

④統合型プログラム

・教育インターンシップ

学生は、書籍制作の現場に身を置きながら実践することで、実質を伴う教育キャリア開発を受けることができた。社会に流通していく書籍の出版における編集作業に関わり、外部団体と連携しながら作業を進めることで、アートの実践スキルを養うことができた。編集作業を継続的に実践することで、精度とスピードと正確性が高まり、社会的実践フィールドに適応する人材としてブラッシュアップされた。

3. 今後の教育プログラムの改善・充実のための方策と具体的な計画

(1)実施状況・成果を踏まえた今後の課題が把握され、改善・充実のための方策や支援期間終了後の具体的な計画が示されているか

Artist Critic Program (ACP)では、これまで本取組により培った実践スキル、完成されたノウハウを活かし、芸術表象研究領域の学生が主体となって、理論系学生と制作系学生が相互に実践経験を得ることのできるプログラムを継続実施する。平成 24 年度の活動成果として、批評誌「CLOSET2012」を 3 月に発行予定。

video exchange program では、平成 22 年度にノルウェー、メキシコ、日本間でビデオ交換を実施し、新たに築いたネットワークを活かし、発展的に大学間同士の映像に特化した情報のやり取りだけでなく、短期留学、レジデンス、展覧会など、グローバルな芸術文化交流する展開を視野に入れた活動としての側面を併せ持ちながら、引き続き活動する。

また、本学最寄りの活動拠点駅である相模大野駅周辺で、本取組みの帰結として目指してきた「アートセンター」の実験的開設を予定している。これまで取組んできた成果を重要なアーカイブとして、学内に留めずより地域に開かれた情報源としてアクセス可能な資料とし

て公開する。各取組において主体となって実施展開してきた在学生や修了生、教職員が中心となって、大学の枠組みを超えた発展的実践の場におけるプログラムを継続実施していく。

4. 社会への情報提供

(1) 教育プログラムの内容、経過、成果等が大学のホームページ・刊行物・カンファレンスなどを通じて多様な方法により積極的に公表されたか

本学ホームページにて本取組の実施状況が随時掲載された。また、本取組独自のホームページ (<http://www.joshiabi.net/outreach/gsgp/>)、SNS サイト、ブログ等にて積極的な情報発信、アーカイブの公開を実施した。各プログラム単位（展覧会など）でもホームページを制作したこともあり、社会への取組認知度や取組理解を繋げることができたと考える。

本取組で実施した展覧会では、DM、フライヤーなどの告知物を毎回作成すると共に、カタログも学生が主体となり制作し、広く配布した。また、数多く実施したトーク・イベントに多数の人材が関わったことで、関係性と連携力の強化に結びつき、実践的プラットフォーム上において人材、社会、地域のネットワークが、大きく、密に広がった。

平成 20 年度と 21 年度には、大学教育改革推進プログラム合同フォーラムにおいてポスターセッションに参加し、来場者へ積極的に情報公開を行った。

5. 大学院教育へ果たした役割及び波及効果と大学による自主的・恒常的な展開

(1) 当該大学や今後の我が国の大学院教育へ果たした役割及び期待された波及効果が得られたか

本プログラムにおいては、常に大学院の実践主体化を念頭に置いてきたが、その成果として、大学院生が実際の出版物の制作過程や、アーカイブとして開示予定のビデオ・アーカイブの制作過程に関わることを通じ、大学院という教育機関に在籍している学生に、社会に関わる研究者であるという認識を持たせることができた。学生一人ひとりが実践的な主体であるという意識を強めることのできる各取組みが、大学院そのものの実践主体化に結びついた。理論系の芸術大学院においては、研究成果を社会へ還元すること自体が、学生の職域のひとつに結実していく。大学院が社会において機能し新たな職域を開発し続けることで、アート&デザインフィールドを底上げし、拡充される。このことが社会に及ぼしていく影響は、芸術以外の分野へも波及することが十分に期待される。

(2) 当該教育プログラムの支援期間終了後の、大学による自主的・恒常的な展開のための措置が示されているか

本取組の実践的な活動の強化・発展させつつ、取組を継続させるために、平成 23 年度は 500 万円を予算化した。持続性を維持するためにアートセンターを設立することを計画しているが、本年度は本学最寄りの活動拠点駅周辺で「アートセンター」の実験的な開設を予定している。

大学院における高度な研究成果を広く社会に還元するとともに、学内外の芸術関係分野にかかわる学生、研究者、アーティスト、学芸員、地域コミュニティなどをエンパワメントすることを目指している。

組織的な大学院教育改革推進プログラム委員会における評価

【総合評価】
<input type="checkbox"/> A 目的は十分に達成された <input checked="" type="checkbox"/> B 目的はほぼ達成された <input type="checkbox"/> C 目的はある程度達成された <input type="checkbox"/> D 目的はあまり達成されていない
<p>〔実施（達成）状況に関するコメント〕</p> <p>美術系大学院教育の改善、充実に貢献しているさまざまな教育プログラムが実行されていると思われるが、主たる専攻である芸術文化専攻の大学院生への具体的な履修プロセスの実態などが見えにくい部分がある。</p> <p>各プロジェクトが実施された結果、どのように大学院教育のシステム改善につながったのか明示が求められ、アート&デザインの現場を利用した体験型授業科目（実地研究、ファシリテーション型、コラボレーション型授業等）やインターンシップ科目は、選択科目になっており、同時時間帯に必須科目が設定されているなど、カリキュラム編成に工夫が求められる。</p>
<p>（優れた点）</p> <p>理論系の「芸術文化専攻」と、実技系の「美術専攻」「デザイン専攻」を結びつける、横断型、複合型の実践的教育プログラムであるところが、評価できる。そして、社会性を涵養し職域を新たに開発するための実践プラットフォームを芸術分野の教育研究で試みた点は高く評価できる。学生同士の自主的な取組を促す教育プログラムである。</p> <p>（改善を要する点）</p> <p>そもそも「表現空間創出」というコンセプトは、芸術活動の本質に根ざすというよりも派生的な要素であり、それは「職域開発」とセットになった、学生のキャリアパスと結びついた構想である。それは現在の芸術系大学院が直面する課題に根ざした妥当な問題意識である。ただ、それがキャリアパスという実利的側面だけに終始すると、芸術を知的、感性的教育の場とする大学としては不満が残る。こうした構造を客観的に意識化し、教える理論的な枠組の教育カリキュラムが必要である。そうすることにより、学生が本教育プログラムの意味をより深く理解し、より豊かな成果を創出する刺激要因になると思われる。</p> <p>申請時の計画によると、海外からアーティスト、批評家、思想家を招聘することとしており、結果の具体的な明示が求められる。プロジェクト型、ダイアログ型、ドキュメンテーション型プログラムの相互補完性をより詰めた上で、有機的融合を考慮することが望まれる。</p>